千船病院広報誌　06号　2026年10月

虹くじら



理想の産婦人科、その先を追い求める
――院長補佐が掲げる「3つの要件」

フォトルポルタージュ
「人」を診る――総合内科の日常

新・細マッチョコンビが行く
千船病院周辺「純喫茶」MAP

●二大連載●

大﨑 洋さん「くじら人」と会いに行く！
太田 圭子　千船病院　看護部長

ゆでたまご嶋田先生のキン肉コラム「千船生まれ！」

千船病院広報誌　06号

虹くじら

contents

2　千船病院広報誌「虹くじら」について

3　千船病院は理想の産婦人科、その先を追い求める
——院長補佐が掲げる「3つの要件」

7　ちぶね〜ぜ　認知症看護認定看護師　中島 昌二さん
患者さんの行動の背景にある思いをくみ取ることが重要

8　フォトルポルタージュ
写真家・奥田 真也が活写
「人」を診る——総合内科の日常

12　【大好評連載】
テーマは「医療」「地域」「エンタメ」
大﨑さん「くじら人」に会いに行く！
第4回　太田 圭子　社会医療法人愛仁会　千船病院　看護部長

15　ちぶね〜ぜ　がん薬物療法認定薬剤師　宮城 景さん
まずは患者さんのキャラクターをつかむ、無理に距離を縮めない

16　ちぶね〜ぜ　医事科母子チーム　乙武 朝紀さん
「一律な対応をしないこと」が大事

17　【話題の連載】Column
ゆでたまご嶋田先生のキン肉コラム
「千船生まれ！」

18　Column
千船病院の階段に「虹くじら」が出現しました！

19　千船病院スタッフが夢中になっているモノ・コトを紹介
これが私の「推し活」

20　新・細マッチョコンビが行く！
こだわりの珈琲から大阪名物「ミックスジュース」まで
純喫茶は街の「玉手箱や〜」

22　・Column「くじらのつぶやき」河野 優雅 / 南 ちひろ
・LETTER FROM CHIBUNE

23　・編集委員から一言
・千船病院までの行き方

千船病院広報誌「虹くじら」について

千船病院の始まりは、日本の高度成長期、1950年代後半に遡ります。当時、大阪府から兵庫県にかけての海沿いは工場地帯として発展していました。工場のほとんどは中小企業。1958年3月17日、そうした労働者の方々に適正な医療の機会を与えたいと考えた医師たちが、『阿部診療所』を開設しました。阿部とは診療所にアルバイトとして勤務する医師の名前をとったものでした。この時点では医療法人としての申請も通っていない、見切り発車のような状態だったといいます。とにかく困っている人を救いたい、という思いが先走っていたのです。住所は、大阪市西淀川区佃町3丁目。阪神電車の千船駅前でした。

58年11月に医療法人愛仁会が設立され、翌59年1月に医療法人愛仁会千船診察所と名称変更。66年5月、千船病院へと発展しました。

2017年からは現在の場所である、阪神電車福駅前に新病院として移転。現在、病床数308床、21診療科を有する急性期総合病院となっています。

草創期、そして高度医療を提供する今も変わらないのは、地域の方々に最高の医療を提供しようという強い意思、困った患者さんがいれば、可能な限り受け入れるという姿勢です。

千船病院では年間100件以上の母体搬送を受け入れており、年間分娩数は2025年で2661件。この数字は大阪府内で最多です。この中には〈妊婦健診を1度も受けずに分娩、または入院に至った〉という未受診妊婦、約30人が含まれます。社会的に問題を抱えている、家族に頼れない人たちにも可能な限り寄り添いたいというのが千船病院の方針です。また千船病院は西淀川区唯一の総合病院でもあります。人の温かみと高度医療——地域から頼られ、選ばれる病院でありたい。

病院のある西淀川区は、クジラのような形をしています。おおきなクジラのように、多様性（＝虹）ある人々を受け入れる存在になる。そんな思いから千船病院の広報誌に『虹くじら』という名前をつけました。



千船病院は理想の産婦人科、その先を追い求める

——院長補佐が掲げる「3つの要件」

吉田 茂樹は千船病院に赴任したとき、「ここで理想の産婦人科を作ろう」と決意した。約20年間にわたる大学附属病院での経験で、それには3つの要件があると確信していた。もともと、千船病院は周産期に強い医療機関だった。吉田が加わり、腹腔鏡手術・がん治療などの婦人科分野を強化した。彼の視線はその先を見ている。それは西淀川区唯一の総合病院としての責務だ。

取材・文　田崎健太　写真　奥田 真也



吉田 茂樹が産婦人科医となるきっかけは小学生時代にある。

「うちは母子家庭で、私が小学1年生のときに東大阪（市）でブティックを始めたんです。森 英恵さん（デザインの洋服）などを扱っていました。そこには大阪のおばさま方が集まっていて、いろいろ可愛がってもらった。女性の力になりたいと思ったのが大きかったかもしれません」

中学校、高校は親元から離れて愛媛県松山市にある愛光学園に進んだ。男子校で毎日が修学旅行のようだったという。そして実家に近い神戸大学医学部に進んだ。卒業後は神戸大学医学部附属病院産婦人科に入局した。

「産婦人科医というのは入り口が女性。患者さんはそこで2分の1になります。ただ、そこから奥が狭くならないんです」

現在、産婦人科と一括りにされている診療科は、内部では産科と婦人科に分けられる。多くの人が産婦人科という言葉から連想するのは、前者の産科だろう。

産科は医学で最も古い分野である。女性の妊娠から出産、産後の母体と胎児を扱う。一方、婦人科は、妊娠・出産以外の女性特有の疾患、健康管理などを行う。その範囲は月経困難症、子宮筋腫、子宮内膜症、がんから、近年は女性ヘルスケア、更年期医療まで広い。

「整形外科ならば脊髄、肩、手、足などの専門領域に分かれます。産婦人科は、腹腔鏡、ロボット（支援）手術、帝王切開といった外科手術から、お産までをすべてやりますので、非常にやりがいがある」

中でも吉田が注力したのは、がん、である。

我々の身体は数十兆もの細胞からできている。受精卵という1つの細胞が分裂を繰り返して増殖、様々な種類の細胞に分化する。それらの細胞が身体の組織、臓器となる。

身体ができあがったあとも細胞は必要に応じて増殖する。どの細胞がどれだけ増殖するかはコントロール下にある。このコントロールから外れて細胞が増殖し続けることがある。余分な細胞が塊となったものが腫瘍である。腫瘍には良性と悪性の2種類があり、がんは後者とほぼ同義だ。

婦人科のがんは3つ。子宮頸がん、子宮体がん、卵巣がん、である。すべて女性の生殖器に発生する悪性腫瘍だ。子宮頸がんは子宮の入り口（頸部）、子宮体がんは子宮内膜、卵巣がんは卵巣の悪性腫瘍である。治療は他の固形がんと同様に、外科手術、抗がん剤、放射線治療、分子標的薬などである。

吉田は、婦人科治療への知見を深めるためにイギリスに留学していたこともある。

「オックスフォード大学で2年間、婦人科疾患の原因遺伝子を見つける研究をしていました」

婦人科がんの最前線にいた吉田に千船病院から声がかかったのは2012年のことだった。

千船病院は大阪府の地域周産期母子医療センターに認定されている。地域周産期母子医療センターは、産科、新生児医療を備え、ハイリスク妊娠や早産、緊急帝王切開などの高度な周産期医療を24時間提供する。

「私が着任する前は、どちらかというと産科がメインの病院。私に求められたのは、婦人科の手術指導でした」

産婦人科部長、そして副院長となった吉田はこれまで温めていた案に取りかかることにした。

「神戸大学に約20年いる間に、自分なりの理想の産婦人科というのが固まってきたんです。それを千船病院で実現してみたいと思ったんです」

理想の産婦人科には3つの要件があるという。

「まずはたくさんの患者さんが集まってくる病院であること。産科で言えば、医療レベルがしっかりしていて、サービスがいい。ご飯も美味しい。産後のケアも充実している。そして値段も高くない。婦人科では、腹腔鏡など低侵襲手術のレベルが高いこと」

低侵襲とは、お腹を大きく切る開腹手術とは違い、〝侵襲〟つまり身体を傷つけることが少ないことを意味する。腹腔鏡、ロボット支援手術を指す。

「患者さんはなるべく小さな傷で済ませたい。1キロを越える子宮筋腫の切除は基本は開腹手術です。千船病院では患者さんが希望されるならば腹腔鏡の手術でやる。できるだけ患者さんの希望に応えたい」

「千船病院はみんなが楽しそうに働いていたんです」

産婦人科医長の河谷 春那が千船病院に戻ってきたのは、吉田の産婦人科部長就任の10年後、2023年4月だった。河谷は初期研修医として千船病院に入職、2022年まで千船病院に勤務していた。

河谷が本格的に医師を目指したのは、神戸大学経済学部4年生のときだった。

「3年生の秋ぐらいから就職活動をしていたんですが、ちょうどリーマンショックの時期と重なってしまっていたんです。希望している会社の募集人数がどんどん減っていくみたいな感じで。思うような結果がでなかった」

2008年9月、アメリカの投資銀行リーマン・ブラザーズの経営破綻をきっかけに世界的な金融危機が起きた。特に輸出産業の経営が悪化、派遣社員の雇い止め、新卒社員採用の縮小となった。

そんなとき、河谷は母親からこう言われた。

あんた、医者になりたいって言ってへんかったか、と。

「確かになりたいと思ったことはあったのですが、本当になれるとは思っていなかった。就活が上手くいかなかったこともあって立ち止まって考えて、挑戦してみようかなと。内定をもらっていた企業を断って、受験勉強を始めました」

文系であったため、高校時代に理科は1科目しか履修していなかった。新たに生物の勉強を始めた。

「数学はもともと好きで、英語は大学で英語の本を読んだりしていました。でも予備校に行ってみると、明らかに自分は劣っているのを実感しました。なりふり構わず、分からないことはすべて聞きにいき、授業以外の時間はひたすら自習室にこもって勉強の日々でした」



就職活動と違って受験勉強は頑張ればある程度結果がついてくる。前に進んでいるという実感があったので楽しかったですと振り返る。

猛勉強の甲斐があり、2010年、宮崎大学医学部に合格した。

「宮崎大学は周産期に力を入れていること、赤ちゃんが生まれて〝おめでとう〟って言えるのはいいなということもあり、自然と産婦人科志望になりました」

医学部卒業後、初期研修で千船病院を選んだのは、第一印象だった。

「千船病院は分娩数が多く、多くの症例を扱うので経験が積めるということは知って

河谷が産婦人科に加えて〝頭痛〟という専門分野に注力するようになったのも、千船病院で出会った指導医の影響だった。

「私自身、もともと頭痛があって学生のときから薬を飲んでいたんです。出産後、復帰したとき頭痛がひどくなってしまった。そこで頭痛外来の稲垣（美恵子）先生に相談して薬を調整していただいた。それがきっかけで頭痛の勉強を始めました」

稲垣は千船病院の頭痛外来を担当している。産婦人科医が頭痛外来を兼ねているのは全国的にも珍しい。頭痛は女性ならではのホルモン変化とも関係がある。産婦人科医ならではの視点は頭痛外来の役に立つと河谷は言う。

「産婦人科の外来で話を伺っていると頭痛をお持ちの方は多い。普段から頭痛薬を使っておられる方が、妊娠を考えるとき、どの薬を使っていいのかなどの相談に乗ることもできる」

今は仕事の他、子育てにも追われる毎日で、一日一日を過ごすだけでいっぱいいっぱいですと、河谷は笑う。ただ、先の道も見えている。稲垣のように頭痛も専門として女性の人生に寄り添う医師になりたい――。

河谷の同僚である菅原 つばさも指導医の良さを感じている。

「今、振り返って見ると指導医の先生たちが、質問したときすぐに答えを教えるのではなかったこと。こちらに考えさせるような質問で返していたこと。自分自身がどうしたらいいのか考えること、そのプロセスを大事にしていたことは印象に残っています」

吉田の掲げる3つ目の要件は、「看護師、助産師などコメディカルが集まってくる病院」だ。コメディカルとは、医師以外の医療専門職である。看護師、助産師の他、薬剤師、臨床検査技師、理学療法士、管理栄養士、医療ソーシャルワーカーなどが含まれる。

吉田は「組織は人がすべて」だと強調する。

「若手が萎縮する環境では人は伸びない。パワハラ、セクハラは問題外」

研修医が伸び伸びしている今の状況はいいと思っていますと微笑む。

2025年、千船病院の分娩数は2661件。婦人科のロボット支援手術の件数は全国7位。吉田が気にかけている産婦人科専門研修プログラムの応募者数ランキングは全国10位。上位は募集人数が多い大学病院が占めている。そこに私立の一般病院である千船病院が食い込んでいる形だ。

今年4月、吉田は院長補佐となり、他の診療科も統括するようになった。

「千船病院は西淀川区で唯一の総合病院でもあるんです。周産期以外の成人系の内科外科をもっと発展させていきたい」



「若手が萎縮する環境では人は伸びない」

吉田はこう言う。

「どの病院で研修するかは人生を左右するので、研修医は必死で情報を集めます。若手産婦人科医が集まる病院は、いい病院なんです」

そのために重要なのは指導医を充実させることだと吉田は考えている。

「指導医の層が厚くて、あらゆる手技を学ぶことのできる病院。なおかつ医局の雰囲気がいいこと」

指導医とは専門的な知識や技術を持ち、若手医師、研修医、専攻医を教育、指導する資格を持つ医師のことだ。臨床だけでなく学会発表、論文作成、研究などの指導も行う。産婦人科の場合、日本専門医機構及び日本産科婦人科学会が認定した資格である。

「指導医は技術だけでなく人格も必要。いや、人格の方が大事かもしれない。今の千船の指導医は粒ぞろい。いわば鉄壁で、病院の宝物と言ってもいい」



ちぶね〜ぜ

チーム医療推進室 主任
認知症看護認定看護師

中島昌二さん

患者さんの行動の背景にある思いをくみ取ることが重要

中島 昌二さんが『せん妄』を発症する高齢患者のケアに興味を持ったのは、千船病院と同じ社会医療法人愛仁会の運営する明石医療センターに勤務していたときだった。

せん妄とは、興奮や注意力の低下、場所や時間が分からなくなる見当識障害などを伴う一過性の意識障害のこと。認知機能が低下することもあり、認知症と見分けがつきにくい。中島さんのいたICU（集中治療室）や整形外科の病棟では、せん妄に苦しむ患者さんも多く、その対応に医療従事者も悩んでいた。そこで2017年、認知症看護認定看護師の資格を取得。薬や身体拘束にできるだけ頼らないケアの提案と実践を行なってきた。

2025年に千船病院に異動してからも、せん妄ケアに注力している。

中島さんの一日は、朝8時半、夜勤を終えた看護管理者の報告を看護部長室で同席して聞くことから始まる。

「夜中に救急で入った患者さんや、病棟で転んだりチューブトラブルがあった人、認知機能が落ちて暴れてしまった人などを把握した上で、優先度の高い病棟から順に全部回ります。御用聞きみたいに『夜どうやった？』って聞くと、看護師さんも対応に苦労しているからいろいろ話してくれるんです」

その後は個々の事案に対し、実情に応じた具体策を考え、夕方に再び対象病棟を回る。次の夜勤帯に対応できそうな提案を伝えて試してもらうのだ。このサイクルを繰り返すうちに、病棟看護師との信頼関係も築かれていった。

高齢の患者さんは、初動の目的を忘れたり、うまく言葉にできないことがある。病棟内を歩き回ったり大声を出したりすると、安全を優先して行動を制止しがちだ。しかし中島さんは、その行動の背景にある思いをくみ取ることが重要だと話す。

「患者さんは本当はどうしたかったのか。それを理解しないといけない。身体拘束がトラウマになった患者さんもいます。ぼくら医療従事者が善意で行なったことが人の心を傷つけることもある。だから委員会などで振り返る機会を提供して、『次はどういうケアをしようか』とみんなで考えて関わり方を変えていく。やっぱり患者さんには、にっこり笑って退院してほしい」

ただ、中島さんは自分の理想を押し付けることはしない。

「正論ばっかり言って、現場の医師や看護師がぼくの提案を採用してくれなかったら意味がない。患者さんと医療従事者の双方の話を聞いて、やってみてもいいかなと思える提案をし、成功体験を積みあげていくことが大切だと思ってます」

今日も全病棟を回る中島さん。親身に寄り添う姿勢は、せん妄ケアを支えるだけでなく、次世代を担う看護師たちにとっても、大きな道しるべになっている。

取材・文　中原 由依子　　写真　奥田 真也

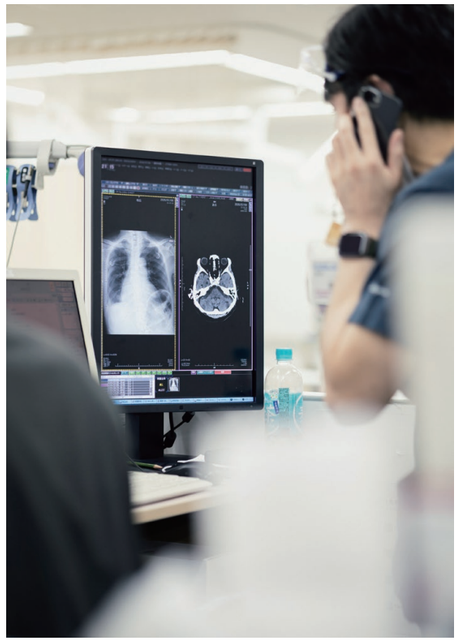


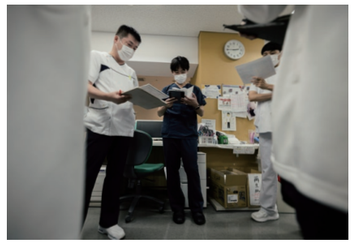
















フォトルポルタージュ
写真家・奥田 真也が活写

「人」を診る —総合内科の日常

写真　奥田 真也　文　中原 由依子

総合内科医長の重田 泰基さんが千船病院に入職したのは3年前。重田さんがこの道を歩み出した背景には、地元である鹿児島の地域病院での経験がある。

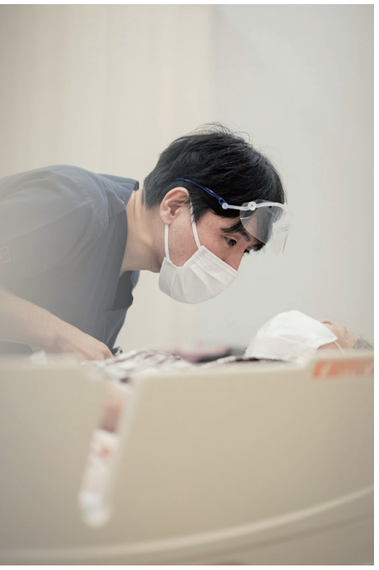
「当時、その病院にあった内科系の診療科は『循環器内科』と『内科』のみ。循環器以外の内科疾患はすべて内科の医師が診る。総合内科と標榜はしていませんでしたが、やっていることは総合内科そのものでした」

日本内科学会では「総合内科専門医」を、内科全体を高いレベルで診られる専門家と定義している。地域ではかかりつけ医として慢性疾患や健康管理を行い、病院では診療科を横断する診察がその役割とされている。

「本来だったら専門医が診るべき病気も、緊急を要する場合、自分たちで診ざるを得ませんでした。得難い経験を数多くさせてもらいました」

若いドクターが育成される場としては恵まれていたかもしれないと重田さんは振り返る。その経験が現在に生きているという。

診療において、患者からの情報を得る「問診」はとても重要だ。まずは患者が診察室に入ってきた様子から観察が始まる。そして「症状がいつ始まったのか」だけでなく、「その前に何があったのか」、さらには家庭背景や生活環境にまで丁寧

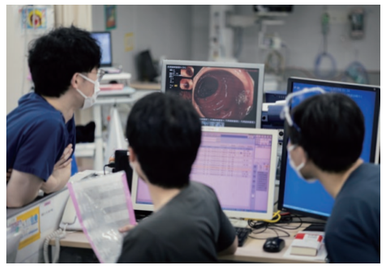




















に耳を傾ける。

「些細な日常会話の中にこそ、診断に結びつくヒントが隠されていることが多い。じっくり話を聞くことで、その人自身のストーリーも見えてくる。そこが面白さでもあります」

過去の温泉の利用歴から「レジオネラ肺炎」と特定したケースや、1、2週間前の歯の治療が発熱の原因だと判明したケースもあった。

そんな重田さんの1日は、朝の病棟回診から始まる。主治医として担当する患者だけでなく、総合内科で入院しているすべての患者のもとへ足を運び、治療経過や体調を確かめていく。回診を終えると外来診察へ向かう。曜日によっては救急当番や当直も担っている。週に1回、午後は多職種のスタッフと病棟を巡る感染対策チーム（ＩＣＴ）や認知症ケアサポートチーム（ＤＳＴ）のラウンドにも参加。患者を診るだけでなく、病院全体の医療の質や安全を支える活動にも積極的に関わっているのだ。

重田さんは、救急当番などを通じて、研修医の指導にも力を注いでいる。その指導スタイルは、自身が現場で教わった実践的なトレーニングに基づいている。

「救急隊からの第一報が入った瞬間、すぐに先輩の先生から『鑑別診断を10個あげて』って言われました。病名を想定することで、どんな検査をするのか、どんな病歴を聞くのか、どんな身体所見を取るのかが変わってくる」

重田さんは研修医に〝ストーリー〟を立てて診るようにと説く。いくつか仮説を立てて、一つひとつ潰していき、原因を探っていく。真摯に、そして丁寧に患者と向き合うことを繰り返し伝える。

医療の専門化、高度化が進んだことで、診療科の隙間に落ちてしまう患者も少なくない。複数疾患を抱える患者に対するアプローチなど、総合内科へのニーズもますます高まっていくだろう。

病気ではなく「人」を診る――重田さんは総合内科の魅力と醍醐味を、熱意を持って次世代へ届けていく。

「千船病院で育った叩き上げの若い子たちが、総合内科の面白さに気づき、ここに残ってくれたら一番嬉しいですね」

奥田 真也（おくだしんや）

1980年、兵庫県姫路市生まれ。大阪藝術大学写真学科卒業後、ウェディング写真、広告写真を中心に活動。特に女性の優しさを引き出すことに定評がある。虹くじらオフィシャルカメラマンとして誌面ほぼすべての写真を担当している。

Instagram @ily_photo_design

テーマは「医療」「地域」「エンタメ」

大﨑さん「くじら人」と会いに行く！

第4回　太田 圭子　社会医療法人愛仁会 千船病院 看護部長

大﨑さんが千船病院関係者とざっくばらんに語り合う連載企画。今回のお相手は、昨年看護部長に就任された太田 圭子さん。「関西の人は飾らず、いつも誰かを笑わせようとしている」という共通項で意気投合したお二人。患者さんや人への向き合い方や、ケアの大切さについて、これまでの経験を交えながら語りました。

構成　虹くじら編集部　写真　奥田 真也

大﨑　プロフィールを見ると、お生まれは北海道なんですね？

太田　そうなんです。赤平市という札幌から1時間ぐらいのところにある炭鉱町でした。5歳ぐらいのとき、炭鉱が閉鎖されて神奈川県茅ヶ崎市に一家で引越しました。北海道の記憶はほとんどないんです。

大﨑　それで中学2年生のとき、看護師さんになろうと思った。

太田　近所のお姉さんが看護師を目指すというのを親から聞いたんです。私もやってみたいと。

大﨑　中2とは早いし、偉い。ぼくが中2のときは、アホ丸出しでした（笑い）。勉強は嫌いだったけど、学校は好き。おっちょこちょいの付和雷同（ふわらいどう）のお調子者（笑い）。

太田　そんなことないでしょう（笑い）。思い立ったら最短距離で突き進みたいタイプなんです。衛生看護科のある高校に進み、系列の神奈川県立衛生短期大学（現・神奈川県立保健福祉大学）に行きました。

大﨑　卒業後は神奈川県の大学病院に入職されています。配属されたのは救命救急センター。これは希望だったのですか？

太田　いえ。面接のときに外科系に行きたいけど、性格的には内科系だと思っていますと言ったら、救命救急センターに配属されました。

大﨑　緊急を要する救命救急は内科、外科関係なく患者さんを受け入れるから、希望通りと言えば希望通り。救命救急の現場って大変じゃないですか？

太田　大変でした。電車に轢（ひ）かれて四肢がない方、バイクの事故で20歳の子が亡くなったりとか……命って儚いと感じました。3年しかいなかったのですが、色んな症例を対応させていただき、いい経験になりました。

大﨑　北海道、神奈川県……この時点まで、全く関西と縁はないですよね？

太田　仲の良かった友だちと、大きな声では言えませんが（大学病院とは別の）病院で当直バイトをしてお金を稼いで、3、4カ月ごとに神戸に来てたんです。

大﨑　なんで神戸なんですか？

太田　神戸って関東人の憧れの場所なんです（笑い）。夜中に仕事が終わってから、友だちと車で高速道路を走って朝6時ぐらいに神戸に着く。須磨の海岸で、海は広いなーなんて思いながらぼんやりしていました。

大﨑　港町といえば近くに横浜があるでしょ（笑い）。

太田　横浜は少しごちゃごちゃしすぎているかなと。神戸はすごいお嬢さんが歩いているというか、私の周囲の人はみんな憧れていたと思います。

大﨑　確かに神戸は坂もあるし海も近いし、北野異人館とか雰囲気ありますよね。

太田　おしゃれ、だなって。海の見えるところにマンション借りて、花屋でもできたらいいな、なんて思っていました（笑い）。

大﨑　須磨の海に入ったりしていたんですか？

太田　私、湘南ギャルを名乗っていましたが、泳げないんです（笑い）。

2年間の約束で関西の病院で働くことに

大﨑　その神戸好きが高じて、関西の病院で働くことになったんですね。看護師になりたいと思ったきっかけ、関西行き、太田さんの人生のキーワードの1つは〝憧れ〟。

太田　そうかもしれません。神戸に住みたいっていう一念で家探しをはじめたんです。そうしたら不動産屋さんから看護師ならば家を探すより病院探して寮に入ったら、と言われたんです。親には「2年間だけ神戸に行かせてくれ」と頼み込んで許してもらいました。



大﨑　実際に勤務した兵庫県立成人病センター（現・兵庫県立がんセンター）は神戸の病院でしたっけ？

太田　（首を横に振り）明石市です。神戸と違って田舎でした（笑い）。

大﨑　関西滞在が2年間で終わらなかったのはどうしてですか？

太田　2年間が終わる6ヶ月ぐらい前に、今の主人と出会ってしまったんです（笑い）。一度帰ったあと、結婚で再びこちらへ。病院に入るとき「私、2年間しかいれないんです」と言っていたのに、もう41年です。

大﨑　関西での生活でカルチャーショックはなかったですか？

太田　ありました！　最初は何を言ってるのかわからなかったんです。患者さんに「ババしたいんや」と言われたんです。私は「ババ」の意味がわからず、「ババ？なんですか」と聞き返した。

大﨑　ババとは、うんちのことやね。

太田　「茶、しばくか」とか。茶、しばく？　なんのこと？　みたいな感じでした。

大﨑　お茶を飲まへんかという意味ですね（笑い）。

太田　電話を取っても、すごく早口で何を言っているのかわからない。明石の場合は大阪弁に加えて、播州弁も入っていたのかもしれません。

大﨑　関西の人はだいたい早口。すぐに慣れたでしょ。

太田　はい。関西の方ってみんな話が上手。いつも誰かを笑わせようとしている。すごい技だなと羨（うらや）ましかったです。真面目な顔をして話しているので「そうなんですか」と頷いていると、「そんなん冗談に決まっているやん」と言われたり。最後に「知らんけど」ってつけられたり（笑い）。

大﨑　ぼくは（大阪府）堺市で生まれ育って、吉本興業というところに入って、東京と大阪をうろうろしてきました。大阪の方がざっくばらんで楽。ざっくばらん、が信頼や安心につながっている気もします。

太田　私だけだったのかもしれませんが、関東の人って自分を良く見せたいっていうのが強いかもしれない。関西の人は飾らず、自分の失敗さえネタにする（笑い）。

大﨑　結婚後、子育てでフルタイム勤務から離れた時期もあったそうですね。

太田　夜勤に入れないので非常勤の時代がありました。主人の両親と同居するようになって、すぐに夜勤やります、病棟（一勤務）やらせてくださいって（笑い）。私の両親も働いていて鍵っ子でした。できれば自分の子供はそうしたくないなって思っていたんですが、結局同じ感じになってしまった。それに悩んだ時期もあったんですが、当時の師長さんから、親が一生懸命働いている姿を見せるのが一番の教育と言われたこともありました。

大﨑　病棟勤務のやりがいってなんですか？

太田　やはり患者さんに深く関われること

ですかね。昔は在院日数が長くて、60日間入院という患者さんもいらっしゃった。そうした長期入院の中で私は何ができるんだろうって考えるのが好きでした。

大﨑　ぼくも母親や、亡くなった奥さんが長期入院していました。そういうとき、実感するのは男って気が利かないこと。日々のケアをしたいとも思うんですけれど、何にも役に立たない。看護師さんに頼り切り。

太田　若い頃、患者さんのにおいの原因が手、口、陰部であると学びました。それから時間があれば手洗い、口腔ケア、陰部洗浄をするようにしていました。

大﨑　清潔でいることは尊厳と関わってきます。でも、それを率先してできるかというと……。ほんまに頭が下がります。

太田　患者さんは気持ちが良かったら笑顔になります。自然治癒力につながる副腎皮質ホルモンが出るとも教わりました。実際にそうだと感じています。ご家族も喜んでくださる。

大﨑　めっちゃ金持ちの人は違うかもしれないですけれど、ぼくらは1日仕事をして帰り道に綺麗な夕焼けが見えたら、あーこの時期の夕焼けやっぱりええなとか、潮風のにおいがするなぁなんて感じることもある。風呂入った瞬間、今日はようやったな、晩ご飯なんやろ、とかそういう積み重ねが楽しみになる。入院している人は夕焼けも見えないし、なかなかお風呂も入れない。身体を拭いてもらえるときは、唯一、ほっとする、快感の時間かもしれない。そういうことに気を遣ってくださる看護師さん、やっぱりええな（笑い）。身体の拭き方もぼくらと違うんでしょ？

太田　（身体の）末梢から中枢に向かって手を動かす、できるだけ冷めないように熱いタオルを使うとかですかね。ただ、今は衛生面、コストの関係で布のタオルから紙のタオルになっています。薄いからすぐに冷めてしまうんですよね。働き方改革もあってそこまで手をかけられないという現実もあります。それが今の課題です。

歳を重ねると、人に興味が持てるようになって面白くなる

大﨑　太田さんは2025年から千船病院の看護部長に就任されました。千船病院の第一印象はどのようなものでしたか？

太田　本当にみんな素直。一生懸命にいろんなことに取り組んでいる。管理職のナースに自分の考えを伝えることに加えて、できるだけ現場を見るようにしています。みんなが働きやすい、働き続けられる職場をいかに作るかを常に考えています。

大﨑　先ほど働き方改革という話も出ました。また千船病院のような急性期病院では入院日数を減らす傾向になっています。太田さんが若かった頃と環境は変わっているんじゃないですか？

太田　（深く頷いて）そうなんです。時間がないので、入院している患者さんの今の姿しか見えない。それぞれの患者さんには歩んできた人生という背景がある。そこに目を向けてほしい。

大﨑　お医者さんでも言葉のかけ方によって、患者さんの受け取り方がだいぶ違う。まずは患者さんの言い分を肯定してからお話される方と、パソコンをずっと見ながら話す人。医療とは直接関係ないんかもしれないけれど、患者とすれば自分のほうを向いてほしい。このおじいちゃんは若い頃、何していたんだろう、職人やったんやろうか、営業マンやろか、どんな映画好きやったんやろ、何が楽しかったやろと普通の会話をしながら寄り添ってくれるとうれしい。人格をきちんと認めてくれるというか。

太田　人に興味を持ってほしいというのは同感です。

大﨑　（腕組みして）若い頃はどうしても自分が、自分が、になってしまう。芸人さんも同じです。若い芸人さんがゲストを迎える番組ってあまり面白くない。40才を過ぎたあたりから、人に興味を持つようになって面白くなる。そこは年いかないとわからへんかもしれない。ただ、ぼくが知る限り、千船病院の看護師さんはみんな優しい。

太田　ありがとうございます。みんな一生懸命やってくれているので、毎朝出勤するとき、感謝、感謝と思ってます。入院生活というのは人生の1ページ。患者さんには千船病院に来て良かったと思ってほしい。同時に働いている看護師も、ここで働けてうれしいと思える病院にしていかなきゃいけないという責任を感じています。



太田 圭子（おおた けいこ）
北海道赤平市出身。神奈川県立衛生短期大学（現：神奈川県立保健福祉大学）卒業後、聖マリアンナ医科大学病院 救命救急センターに入職し、看護師としてのキャリアを歩み始める。兵庫県立成人病センター（現：兵庫県立がんセンター）、明石医療センターで勤務。その後2018年から明石医療センター看護部長、尼崎だいもつ病院看護部長3年を経て、2025年から千船病院看護部長に就任。職員からも患者・家族からも選ばれる病院を目指し、変革に取り組んでいる。

大﨑 洋（おおさき ひろし）
1978年、吉本興業株式会社に入社。多くのタレントのマネージャーを担当し、音楽・出版事業・スポーツマネジメント事業、デジタルコンテンツ事業、映画事業などの新規事業を立ち上げる。2009年に代表取締役社長、2019年には代表取締役会長に就任。2023年6月代表取締役会長を退任。2023年3月全広連日本宣伝賞・正力賞受賞。2023年5月大阪・関西万博催事検討会議共同座長に就任。また、公益社団法人「2025年日本国際博覧会協会」シニアアドバイザーも務める。現在、一般社団法人 mother haha を設立し代表理事に就任。著書に『居場所。』（サンマーク出版）、『あの頃に戻りたい。そう思える今も人は幸せ』（飛鳥新社）。



ちぶね〜ぜ

薬剤科　副主任
がん薬物療法認定薬剤師　**宮城 景** さん

まずは患者さんのキャラクターをつかむ、無理に距離を縮めない

千船病院の薬剤科には現在30人の薬剤師が在籍する。その一人が、副主任の宮城景さんだ。

「薬剤師は安全な薬物治療を支える専門家。患者さん一人ひとりの薬を調剤し、服薬指導を行うほか、処方内容に疑問があれば医師に確認したり、看護師からの相談に応じたり、多職種と連携しながら薬剤師としての専門性を発揮しています」

医療の進歩に伴い、薬の種類や形態は多岐にわたっている。服用に注意が必要な薬もある。

「患者さんが自分で打つ注射薬などは、特に高齢の方には取り扱いが難しい。薬の飲み合わせや服用のタイミング、副作用など、患者さんが気をつけないといけないポイントもばらばら。大切な部分を患者さんに理解してもらい、適切に服薬管理をしてもらえるよう、フォローするのが薬剤師の役割です」

2025年10月、宮城さんは日本病院薬剤師会認定の「がん薬物療法認定薬剤師」の資格を取得。以来、通常業務に加え、がんの薬物療法の専門薬剤師として化学療法室での業務を中心に活躍中だ。化学療法室では、診療科を横断してがん患者さんの薬物治療の実施、管理にあたっている。

「近年は分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬など、次々と新しい治療法が出てきているので、院内の勉強会で情報を共有したり、医療ニュースや最新の臨床試験の結果にも目を通すなどして日々研鑽に励んでいます」

そんな宮城さんが、薬物療法を受ける患者さんと向き合うときに心がけているのは、患者さんのキャラクターをいち早くつかむことだ。そして無理に距離を縮めようとしない。

「治療は始めてみないと分からないこともたくさんあります。まずは顔見知りになり、必要最低限の説明だけします。冗談を交えてしゃべっても大丈夫なのか、それとも落ち着いて話をするのが好きな方なのかを見極めて、親しくなってから詳しくフォローする。夫婦で来られた場合は、奥さんを中心に話すのか、旦那さんがいいのかということも考えています」

がんの薬物治療は長期間に及ぶことも少なくない。

「長い方だと7、8年のお付き合いになることもあります。以前担当した患者さんと再会したときに、ぼくの名前も顔も覚えてくださってたことや、病棟でも『宮城さんに話を聞いてもらって楽になったわ』と患者さんに言われると、本当にうれしいですね」

今後は認定資格を生かし、がん患者さんのための薬に関する相談窓口として、外来化学療法室における「薬剤師外来」の体制づくりに力を注いでいく。

取材・文　中原 由依子　　写真　奥田 真也

ちぶね〜ぜ

医事科母子チーム

乙武朝紀さん

一律な対応をしないことが大事

取材・文　中原 由依子　　写真　奥田 真也

千船病院の看板である「産婦人科」の診療を、裏側から支えているのが医事科母子チームだ。外来と病棟に配置された16人の母子チームスタッフが担う業務は、受付での案内や診療支援、レセプト（診療報酬請求）処理、会計入力など多岐にわたる。いわば患者さんと病院をつなぐ〝架け橋〟である。

このチームをまとめているのが、主任の乙武 朝紀さん。千船病院に2013年に入職。外来・入院・救急の各受付業務を経験したのち、2018年、医事科母子チームに配属となった。3年前に主任となり、自身も患者対応にあたりながら、スタッフの指導やシフト管理、クレーム対応、委員会への参加など多忙な毎日を送っている。

産婦人科は比較的若い女性の受診が多いことから、病院内で新たなサービスや仕組みを導入する際、まず産婦人科で運用してみることが少なくない。主任になってからは、そうした新たな取り組みに関わる機会が増えた。

「妊婦さん向け情報配信アプリのコンテンツを考えたり、コロナ禍で休止していた産後エステを再開させたり、診療web予約の導入では、先生方と直接多様な相談をさせていただきました」

乙武さんは日頃より、医療を受けに来られる患者さんに対して、事務としてできることは何かを考え実践している。

「患者さんが最初に接するのは医事科の外来スタッフ。最初の挨拶が明るければ、『この病院に来てよかったな』と思われるでしょう。対応によっては逆に気分を害し、不安や緊張を抱えたまま、診察室に向かう場合もあります」

彼女が心がけているのは、「一律な対応をしないこと」だ。

入職当初、電話対応で相手の話を聞いているつもりが、マニュアル的な受け答えになってしまい、お叱りを受けたことがあった。そこで事前にカルテから読みとれる情報はないか、目を通して確認したり、対面でも電話でも、患者さんの言葉や様子に気を配るようにしている。

「窓口に立っている以上、様々なことで声がかかります。それに対して真摯に対応して、最後はありがとうと言って帰られるときが一番嬉しいです」

主任になった今は、その思いを母子チームだけでなく医事科全体でも共有し、みんなを巻き込んで、千船病院のさらなる信頼向上を目指したいと考えている。



ゆでたまご嶋田先生のキン肉コラム

「千船生まれ！」

〈大好評連載〉

第4回
実はぼく不安症なんです！



ぼくが『キン肉マン』の原型となる漫画を描き始めたのは小学4年生のときでした。

その頃、休み時間になるとノートやテストの答案用紙の裏に自分で考えたキャラクターのストーリーを作り、クラスメイトに披露していました。キン肉マンはそんな中で生まれたキャラクターの1つでした。「キン」がカタカナなのは、当時のぼくは「筋」の漢字が書けなかったからです。

小学5年生になったある日、ぼくはいつものように住んでいた団地の壁にボールをぶつけてとるという練習をしていました。とり損なったボールを追いかけて道路に出た瞬間、車にはねられてしまいました。頭蓋骨骨折、でした。

救急車で運ばれたところ、「今晩がヤマですね」と言われたそうです。それぐらい危ない状態だったと、あとから聞かされました。幸い、命はとりとめましたが、3ヶ月もの間、入院生活を送らなくてはなりませんでした。

遊びたい盛りの子どもにとって、入院生活は苦痛です。そこでぼくは漫画をひたすら読み続け、模写に励むことにしました。読んだ漫画雑誌の1冊『月刊少年ジャンプ』に新人漫画賞を受賞した作品が載っていました。

新人の描く漫画だから下手なんやろなと高をくくっていたのです（小学生なのに生意気ですね……）。ところが読んでみると、「う、うまいやんけー」と驚きました。調べてみると他の漫画雑誌でも新人漫画賞がありました。賞を獲って、漫画家でデビューするという道が見えたのです。

そこからぼくは大学ノートを使ってコマを割って漫画を描き始めたのです。

〝コマ割り〟とは、ページ内を枠線で区切ってシーンや時間経過を表現する手法。基本は話を「右から左」「上から下」へと進めていきます。今となっては言語化できますが、当時は試行錯誤で学んでいきました。

そうして描いた漫画の1つが『キン肉マン』だったのです。子どもはムキムキの筋肉が大好き。そして屁で空を飛ぶという、子どもの好きな〝下ネタ〟も入っていました。このキン肉マンは学校中で回し読みされて、大人気となりました。

その後、プロの漫画家として『週刊少年ジャンプ』でキン肉マンの連載を始めたのは1979年のこと。少年ジャンプはとにかく競争が激しい漫画雑誌でした。バロメーターとなるのは読者による「人気投票」でした。大げさに言えば、「1位」でなければ漫画家ではない、みたいな雰囲気が編集部にはあったのです。

ぼくたちのキン肉マンは滑り出しは良かったものの、連載1年目に人気投票でがたっと順位が下がったことがありました。

実はぼくはひどい不安症です。もう自分たちは必要とされていないのではないか、漫画家としてやっていけないのではないかと心配になってしまいました。新聞を開くと求人欄ばかり見てしまう、なんて時期もありました。キン肉マンの主人公、キン肉スグルが試合前に逃げだそうとするのは、ぼくの姿と重なっているかもしれません。

80年代の週刊少年ジャンプの連載といえば――。『ドラゴンボール』『キャプテン翼』『北斗の拳』。野球で言えば、みんな4番バッターみたいなもの。毎週、どの漫画が人気投票の1番になるのかとしのぎを削っていたのです。人気が落ちたら連載は打ち切りという恐れがずっとありました。表現は悪いですけれど、逃げ回っている指名手配の犯罪者みたいやなと思ったこともあります。

あとから、どんなに強い格闘家でも試合前になると、会場が火事になって中止になってしまえと願うことがあると聞きました。それと近いかもしれません。とにかく走り続けるしかなかったんです。

60才を超えた今も読者から必要とされなくなったら、人気がなくなったらどうしようか、と思うことはあります。ただ、その恐怖が最近、和らいでいます。それはこの連載で度々書いてきた柔術のおかげです。

現在、道場には週3日通っています。練習の日は、まず私の師匠である井賀 孝先生のパーソナルトレーニングを受けます。そして通常のクラスに参加、最後は仲間とのスパーリング。計3時間。

もっと強くなりたいという思いで、食事にも気をつけるようになりました。ブロッコリーやアスパラ、鶏のササミ、ゆで卵などのタンパク質が中心。必要に応じて、ちっちゃいおにぎり。それ以外を食べたいという欲求は減りました。まさにぼくの生活の中心に柔術があるのです。

気の置けない柔術仲間との話もいい気分転換になります。柔術を学んだことで、漫画で使う新しい必殺技を思いついたこともあります。心身ともにいい流れで、これからも作品を世に送り出していきたいと考える今日この頃です。

嶋田 隆司（しまだ たかし）

1960年10月28日、大阪市西淀川区生まれ。私立初芝高等学校卒。中井 義則との合同ペンネーム「ゆでたまご」の原作担当。『キン肉マン』は嶋田が中井に出会う前から描いていたキャラクターが元になっている。緻密な設定を作り、後に読者の反応をたくみに取り入れたストーリーを創ると評価が高い。キャラクター原案のデザインも行なっている。

ゆでたまご嶋田先生のコラムが読めるのは「虹くじら」だけ！









これが私の「推し活」
oshikatsu

取材・文　中原 由依子　　写真　奥田 真也



今回紹介してくれるのは…

管理科　総務部門

有吉麻理子（ありよし まりこ）さん

2010年千船病院入職。管理科人事部門や看護部長室での事務担当を経て、2014年に管理科の総務部門に配属。現在は4人体制で幅広い業務の対応に当たっている。

院内で「最後の砦」と呼べる部署がある。それは3階の管理科だ。管理科の入口に最も近い場所に位置する総務部門は、物品や印刷物の発注、来客対応をはじめ、職員専用携帯電話や職員寮の管理など、院内スタッフを支える幅広い業務を担っている。その総務部門に10年以上勤務する有吉 麻理子さんは、院内外からの問い合わせや来訪者に最初に対応する、いわば管理科の“顔”ともいえる存在だ。

「みんな、わからないことがあると『管理科なら何とかしてくれる』と『誰に聞いたらいいのかわからんから、とりあえず有吉さんに聞いてみた』と言って電話をかけたり、直接来られたりするんです。まずはよくお話を聞いて、『これはこうしましょう』『この件は担当者に聞いてみますので少し待ってください』とか、一つひとつ解決策を探しながらやっています」

そんな有吉さんの机には、アザラシのイラストが描かれたマウスパッドやクリアファイル、マグネット、テープなど、様々なアザラシグッズが並ぶ。

「他の“アザラー”（アザラシ好きの人）さんたちに比べたら、私はまだまだ少ないほうです」

そう笑う有吉さんがアザラシにしになったのは2021年のこと。新型コロナ禍で様々なことが制限され、世の中全体がどこか張り詰め、気持ちも沈みがちだった頃だ。偶然見ていた夕方のニュースで、大阪・海遊館のワモンアザラシの赤ちゃん「ミゾレ」が初めて水に入る練習をする映像が紹介されていた。その愛らしい姿に、自然と心が癒やされた。

それまでアザラシにはほとんど興味がなかった。しかし、その日を境に一気に夢中になった。インターネットや動画でアザラシの種類や生態を調べ、海遊館へも足を運んだ。何度か通ううちに、同じようにアザラシを観察している人たちと知り合い、魅力を語り合ったり、SNSで情報交換をしたりと、交流の輪も広がっていった。今では、その情報をもとに全国各地の水族館を巡ることが休日の楽しみになっている。

グッズを買うのも、水族館を応援したい気持ちがあるからだ。

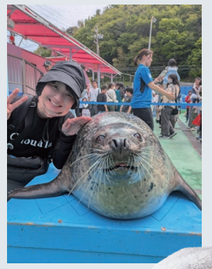
「丸っこい体や、つぶらな瞳が本当にかわいいんです。飼育員さんとじゃれ合う姿も見ていて飽きませんし、合図で口を開けたり、ひっくり返ったり、手を挙げたりするのは、ただ芸をしているわけではなく、健康チェックの意味合いもあるんです。また、アザラシは血液中に酸素をたくさん取り込めるので、水の中で30分くらい眠ることもできるんです。知れば知るほど面白く、愛らしい動物ですね」

アザラシのことを語り始めると話は尽きない。ここまで詳しくなるとは、有吉さん自身も思っていなかったという。

「北海道・襟裳岬の沖の岩場には、野生のゼニガタアザラシが生息しています。5～6月は出産シーズンなので、生まれた赤ちゃんや子育てをする様子をいつかこの目で見てみたいですね」

そんな夢を胸に、有吉さんはアザラシグッズを愛でながら、今日も管理科の窓口で、訪れる人たちを笑顔で迎えている。



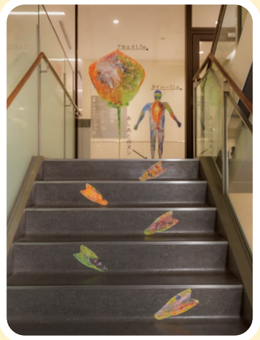


三重県伊勢シーパラダイスでの有吉さんとゴマフアザラシ（本人提供）



写真　奥田 真也







STREET MEDICAL

ストリートメディカルとは「ハッピー」を感じながら自然と健康になること！

千船病院の階段に「虹くじら」が出現しました！

千船病院では「ハッピーを感じながら自然と健康になる」というストリートメディカルをいろいろな場所で実践しています。

そこで今回、我々が目をつけたのは「階段」！

階段は健康にいいとわかってはいるけれどついエレベーターやエスカレーターを使ってしまいますよね。階段を使いましょうと促す表示が多くありますが、その多くが「健康になるから」「1段上ると○○kcal消費できます」といったもの。

ストリートメディカルの実践ではあえて「健康」というキーワードを使いません。楽しい、おもしろそう、という前向きな気持ちから結果として健康にいい行動をとってもらう。

どうしたら階段を楽しく使用してもらえるか、みんなでアイディアを出し合いました。そして考えたのは階段にテーマをつけること！　この広報誌の「虹くじら」が海で泳いでいるような階段にすることになりました。

昨年の11月、「西淀川芸術祭 みてアート2025～にしよどがわのまちになる日～」が開催。西淀川芸術祭は、かつて大気汚染などが深刻化し「公害のまち」とも呼ばれた西淀川区で、アートをきっかけにみんなで交流するイベントです。区内の各所でアート展示、ワークショップなどのイベントが同時開催。千船病院では、みなさんに階段に飾る絵に色を塗ってもらうことにしました。

ただ、そこには少し工夫がしてあります。海の動物を実寸大にしてその大きさを体感してもらったり、足跡だけ張り付けてその答えは階段を上らないとわからなかったり――。

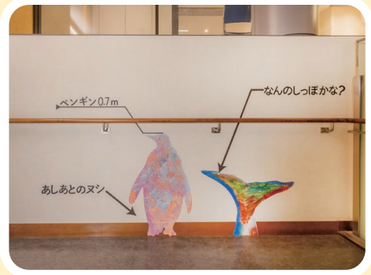
その後のアンケート調査では階段を使用する機会が増えたという方も多く見受けられました。

ストリートメディカルの取り組みが少しずつ院内外に広がっていき「千船病院は珍しい取り組みをしているね」と言われるようになってきました。今後も医療だけに捉われない新しい視点で「ハッピー」の文脈から健康行動につなげる取り組みをしていきます！

村田 尚寛（むらた なおひろ）
リハビリテーション科　科長

2009年、理学療法士免許取得し愛仁会リハビリテーション病院に入職。2014年しんあい病院を経て、2018年より千船病院リハビリテーション科に勤務。2022年より千船病院のより地域に根差した医療の展開に向けて、「ストリートメディカル」を提唱している横浜市立大学先端医科学研究センター コミュニケーション・デザイン・センターへ出向。「ストリートメディカル」の概念と実装の仕組みを学びながら、千船病院・西淀川区に汎用できるよう奔走中。







5. coffee house GIZA

大学時代に喫茶店でアルバイトをしていた店主が、43年前に実家の1階にオープンした純喫茶です。看板メニューは、当時出会った味を再現した、半熟の薄焼き卵で包む「ギザ風ドライカレー」。深煎りでコクのあるコーヒーも人気です。月替りで壁に飾られるレコードジャケットや、奥様とお客様の楽しげな会話も、この店ならでは。人と人とのつながりを感じる温かな一軒です。



大阪府大阪市西淀川区姫里 2-10-7
最寄り駅：姫島駅
[営] 月～土 6:15-18:00
祝 6:15-15:00
モーニング 6:15-10:30
[休] 日　＊喫煙可



6. 喫茶メモリー

以前は現店主のお母さまが西区で喫茶店を営み、2002年に現在の場所へ移転しました。店名の“メモリー”には「思い出に残る店に」という意味が込められています。喫茶店とお好み焼き店がつながっており、フレンチトーストやカレーといった喫茶メニューから鉄板焼きまで、豊富なラインナップが魅力。食事からコーヒーまで気軽に楽しめ、2つの異なる雰囲気を味わえる、地域に愛される一軒です。



大阪府大阪市西淀川区姫島1-28-8
最寄り駅：姫島駅
[営] 月・火・木～日・祝日 7:00-18:00
(17:30L.O)
モーニング 7:00-11:00
[休] 水　＊喫煙可

MAP







3. 英国屋

旅好きの店主が父と共にお店をはじめたのは52年前。その後、当時はまだ珍しかったコーヒーマイスターの資格を取得し、現在も店内で様々な豆を焙煎して提供しています。名物はじっくり時間をかけて抽出するダッチコーヒー。木目が映える落ち着いた店内は常連客で賑わい、週末には喫茶店巡りを楽しむ若者も各地から訪れます。モーニングメニューは33種と圧巻で、選ぶ楽しさも魅力です。



大阪府大阪市西淀川区佃 2-5-24
最寄り駅：千船駅
[営] 月・火・金～日 9:00-17:00
木 9:00-12:00
モーニング 月・火・金～日 9:00-11:30
木 9:00-12:00
[休] 水　＊喫煙可





4. COFFEE HOUSE Kwanza

スワヒリ語で“初めて”などの意味があるKwanza（クワンザ）は、アフリカに憧れてJICA海外協力隊としてタンザニアで働いた経験をもつ店主が営む喫茶店です。創業32年の店内はアフリカを思わせる装飾が随所に飾られ、コーヒーもキリマンジャロを入れたこだわりのブレンド。目・鼻・舌でアフリカを感じながら、ゆっくりゆったり寛げる空間です。



大阪府大阪市西淀川区花川 2-20-15 1 階
最寄り駅：姫島駅
[営] 月～金：7:00-17:00
土 7:00-15:00　祝 7:00-12:00
モーニング 7:00-11:00
[休] 日　＊禁煙



クリームソーダの色が選べるって
最高やん。違う色を2つ選んだら、
まるで筋肉の“左右非対称トレ”
みたいで映えすぎるわ。
（大場）

臨床研修医 2 年目
大場 絢心先生

臨床研修医 1 年目
小林 拓矢先生



新・細マッチョコンビが行く！





1. サン

1990年創業。待ち合わせ場所として親しまれてきた店名を受け継ぎ、地域に愛され続ける純喫茶です。バラや天使の飾りが彩る店内には、明るく温かな雰囲気が広がります。店主が目指すのは「笑って入って、笑って帰れるお店」。サービス精神あふれる接客と、アイスコーヒーやクリームソーダが人気。食事メニューも豊富で、オムライスや焼きそばは「早くておいしい」と好評です。



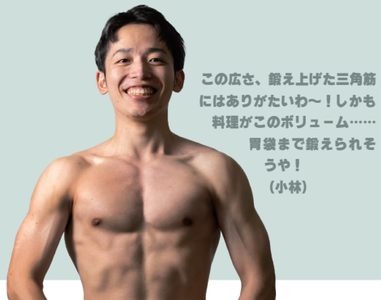


大阪府大阪市西淀川区千舟 2-3-41
最寄り駅：御幣島駅
[営] 月～土 7:00-17:00
モーニング 7:00-11:00
[休] 日・祝　＊喫煙可



2. RAN

創業55年。お母さまが始めた喫茶店を、現在は家族で大切に守り続けています。広々とした店内で味わえる、昔ながらの鉄板ナポリタンや数量限定の日替わりランチは人気メニュー。果物をたっぷり使った濃厚なミックスジュースもおすすめです。どの料理もボリューム満点で、9割が常連客という温かな雰囲気も魅力。地域に長く愛され続ける純喫茶です。



この広さ、鍛え上げた三角筋
にはありがたいわ～！しかも
料理がこのボリューム……
胃袋まで鍛えられそ
うや！
（小林）



大阪府大阪市西淀川区姫島 3-11-35
最寄り駅：福駅
[営] 平日 7:00-17:00 (夏季～ 16:00)
土・祝 7:00-14:00
日 8:00-10:45 (モーニング)
モーニング 月～土・祝 7:00-10:45
[休] 不定休　＊禁煙

こだわりの珈琲から大阪名物「ミックスジュース」まで

純喫茶は街の「王手箱や～」

千船病院のある西淀川区には、時代を越えて愛される純喫茶が数多く残っています。
店ごとに異なる照明、椅子、カップ、そして名物メニュー。今回は、千船病院の新・細マッチョ軍団が、そんな“街の休憩室”をそっとご案内。筋肉も心もほぐれる、ゆったりとした喫茶時間をお楽しみください。

取材・文　南 ちひろ / 河野 優雅　　写真　奥田 真也





編集委員コラム

「くじらのつぶやき」

第4回　千船病院 広報室　河野 優雅／南 ちひろ

編集委員を務めております、千船病院 広報室の河野と南です。

私たちは『虹くじら』の制作にあたり、企画会議から取材交渉、スケジュール調整、取材・撮影への同席、原稿チェック、校正確認まで、発行に至る一連の工程を担当しています。編集部の皆さんに支えていただきながら、毎号、院内外の方々に〝千船病院らしさ〟をお届けできるよう取り組んでいます。

『虹くじら』は2022年9月に創刊しました。当初は院内での認知がされておらず、取材の協力を依頼する際に戸惑われることもありました。しかし地道に発行を重ねる中で、職員をはじめ、当院を訪れる患者さま、連携医療機関の方々にも少しずつ手に取っていただけるようになり、今では「読んでいますよ」と声をかけていただくことも増えました。編集委員として、これほど嬉しいことはありません。

広報誌は、診療に直接必要なものではありません。それでも私たちが発行を続ける理由は、千船病院には〝診療内容だけでは語りきれない魅力〟がたくさんあるからです。患者さまに寄り添う姿勢、専門性の高い技術、そして何より、日々の医療を支えるスタッフ一人ひとりの温かさ。こうした魅力を、専門的な文章ではなく、写真やイラストを交えた親しみやすい表現でお伝えすることで、医療職以外の方にも自然と読み進めていただける広報誌を目指しています。

『虹くじら』を通じて、千船病院をより身近に感じていただき、「この病院にはこんな人たちが働いているんだ」「こんな思いで医療を届けているんだ」と知っていただければ幸いです。これからも、読んでくださる皆さまの心に届く広報誌をつくっていきたいと思います。

LETTER FROM CHIBUNE



千船病院は基幹型臨床研修病院として優れた医師の育成に力を入れており、卒後2年次、1年次の研修医17名が互いに切磋琢磨し、研修に励んでいます。臨床研修制度では、医師免許取得直後の2年間で内科、外科、救急、小児科、産婦人科、精神科、地域医療などをローテーションし、幅広い診療科を経験しながら医師としての基本的診療能力を養うことを目的としています。

当院の救急医療研修では、平日の日中の救急当番と夜間の当直および土日の日直を研修医が行なっています。内科・外科系の救急搬送およびウォークインの患者さんのファーストタッチを研修医が行い、単独診療にならないよう指導医とともに診察する体制をとっています。

また、地域医療研修では診療所・中小病院・保健所など、地域の医療機関でかかりつけ医の役割や在宅医療を学び、「住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続ける」ことの意味を理解する場となっています。

当院では西淀川区の開業医や尼崎だいもつ病院を中心とした診療所・病院研修と、へき地の公立神崎総合病院での研修の2つの地域医療研修プログラムから選択でき、介護老人保健施設や保健福祉センターでの研修も行なっています。

2026年度からは医師の偏在改善のために、都市部（医師多数県）の研修病院に所属する研修医が、地方（医師少数県）の病院で研修を行う『広域連携型プログラム』が導入されています。当院は三重県の済生会松阪市民病院と連携し、1年目後半から2年目前半の6ヶ月間、済生会松阪市民病院で内科研修を行います。

臨床研修修了後はさらに専門研修を受け、一人で診療を完遂できる能力を身につけていきます。当院では内科、小児科、産婦人科、麻酔科の4つの専門研修プログラムの基幹施設になっており、毎年およそ半数の研修医が引き続き千船病院の専攻医として日々研鑽を積んでいます。

研修医が指導医の指示の下、患者さんの担当医として診察や処置等に関わることがありますが、将来を担う医師を一緒に育てる気持ちで温かく見守っていただければ嬉しく思います。

（診療部支援室 兼 事務部 企画分析科　科長 西村祐美）

虹くじら　編集委員から一言

千船病院広報誌『虹くじら』は、編集チームと
病院内編集委員による会議から企画を生み出しました！



千船病院 チーム医療推進室科長

濱田 恵美子

編集に携わる中で、千船病院の医療を支える多職種の連携や、それぞれの専門性の奥深さを改めて実感しました。 特に「人」に焦点を当てることで、日々の実践の背景にある思いや工夫が見えてきたと感じています。 本誌が、地域の皆さまにとって千船病院をより身近に感じていただく一助となれば嬉しく思います。



千船病院 看護部科長

小野 真紀

はじめまして。私は以前から『虹くじら』に興味があり、「いつか関わってみたい」と思っていました。今回その機会をいただき、とてもうれしく感じています。日頃から千船病院は地域の皆さまに支えられていることを実感しています。『虹くじら』を通して、病院のことをより身近に感じていただけるよう、楽しく分かりやすい情報をお届けしていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



千船病院 整形外科部長

原田 義文

スケジュール的になかなか編集に参加できず、でき上がった『虹くじら』を楽しく拝見しています。『虹くじら』は病院の情報を発信するだけでなく、地域の魅力もお伝えしています。もっと周知されて全国に西淀川区の魅力を発信できれば、地域の活性化の一翼を担える可能性があると思っています。

虹くじら STAFF

千船病院編集委員
樋口 喜英
原田 義文
越智 敏之
黒田 朋子
濱田 恵美子
小野 真紀
村田 尚寛
中田 真衣
河野 優雅
南 ちひろ

編集長
田崎 健太（カニジル）

編集
中原 由依子（カニジル）
石谷 昌子（カニジル）
両角 浩太郎（カニジル）

写真
奥田 真也

デザイン
三村 漢（niwa no niwa）
大貫 茜（niwa no niwa）

今号表紙イラスト



朝倉 弘平
（絵かき / Artist / Painter）
1983年宮城県仙台市生まれ。宮城野高校美術科油彩専攻、文化服装学院卒。2013年より、家族と共に鳥取県の大山に移住、アトリエを構える。

Instagram　@asakura_kouhei
https://www.asakurakouhei.com

千船病院までの行き方

所在地
〒555-0034 大阪府大阪市西淀川区福町3丁目2番39号
TEL 06-6471-9541（代表）

電車でお越しの方
阪神なんば線「福駅」下車　徒歩1分

バスでお越しの方
大阪市営バス 92号
福町行『大阪駅前』⇒『大野』

大阪市営バス 43号
酉島車庫前行『大阪駅前』⇒『福町三丁目』

オンデマンドバス
西淀川区内各停留所 ⇒『千船病院（6978-70）』



▼千船病院公式 WEBサイト
https://www.chibune-hsp.jp

▼千船病院公式 Instagram
@chibune_hsp1958
毎週木曜日の「ハッピー木曜マルシェ」など、情報盛りだくさん。登録お願いします！

社会医療法人 愛仁会
AIJINKAI
千船病院